

海外活動報告書

一般財団法人いのうえ生命の財団 理事長 殿

氏名	大城 沙大里
活動先国名	アメリカ（マサチューセッツ州、ボストン）
活動先（機関名・所属、学会名など）	Brigham and Women's Hospital
活動期間（西暦）	2025 年 3 月 19 日 ～ 2025 年 4 月 2 日
支援金給付期間	2 週間
活動テーマ	患者中心の医療アプローチと先進的な産科麻酔技術の探求―国際的な視点から日本の医療への応用

活動の実施状況及び成果

医療技術の進歩により、患者主体性の医療アプローチが重視されるようになっていきます。特に、産科麻酔では、安全で快適な分娩環境を提供し、母体および新生児の出産後の状態を改善することが求められています。本研究の目的は、産科麻酔における先進的な技術と妊婦主体性のアプローチを学び、それを日本の医療に応用する方法を探ることでした。また国際的な視野を持つ医療人になるための第一歩として、日本の産科医療の発展に貢献するための知識と経験を得ることも目的の1つでした。

今回訪れた Brigham and Women's Hospital は年間 9,000 件～10,000 件のお産が行われている病院であり、世界有数の病院規模と研究を兼ね備えたハーバード大学医学部の教育病院です。今回目的としていた、Dr. William Camann や Dr. Ayumi Maeda の研究である「産科麻酔における患者中心のアプローチ」や「Gentle Family-Centered Cesarean」の理念を形にした医療を、問診時への同行や手術室・病室での手技や手術の見学を通して学ぶことができました。加えて、現地の医師やレジデント、医学生とディスカッションを行い、日本の医療との比較を行うことができました。

今回の見学を通して学んだことを述べるにあたり、まずアメリカと日本の産科麻酔における違いを 3 つ示します。1 つ目は入院期間が日本と比べて短いこと、2 つ目は硬膜外麻酔を主とした無痛分娩が主流であること、そして 3 つ目は帝王切開の場合は旦那さんや妊婦さんのお母様などの家族が手術室に入ることができる、ということです。これらの観点を主軸として、当初研究目的としていた「妊婦の求める麻酔管理、分娩時の疼痛管理、新生児への影響を最小限に抑える麻酔技術」についての知識を深めることができました。

特に「Gentle Family-Centered Cesarean」は非常に興味深かったです。これは帝王切開の手術中に、赤ちゃんが誕生した直後、透明なビニールを介した状態でお母さんやお父さん、またはおばあちゃんと赤ちゃんが対面することです。これらは、「医療」に必要なものか、と問われると必ずしも必要であるとは言えないかもしれませんが。しかし「出産」という場であるからこそ求められるものなのだと考えました。実際の様子を見学し、お母さんはじめとする家族の感動されている姿は尊重されるものだと感じました。また家族が携帯電話等で手術室から兄弟や親戚にビデオ通話をしていたり写真を撮ったりする様子は、赤ちゃんを迎える家族にとって一生の思い出となるのだろうと思いました。

また、医師の専門医制度の違いからも臨床の現場に違いがありました。日本には麻酔科医の専門医と産婦人科の専門医はいますが、産科麻酔の専門医は制度上いません。これらの違いが日本における無痛分娩率の向上につながっていないのだと考えました。自然分娩と無痛分娩の賛否は別の問題であるとして、妊婦に選択肢があることは非常に重要なことであるように思います。妊娠 22 週以降の死産率と早期新生児死亡数を合わせた周産期死亡率や妊産婦死亡率が極めて低いことから、「世界で一番の周産期医療」といわれることもあります。しかし、より良い医療を妊婦に提供するためには未だ改善点はあるように感じました。

今後の活動予定 研修以前より所属しております、本学の麻酔学研究会の『Basics of Anesthesia, 8th edition』を用いた学習や、月に 1、2 回ほどのグラウンドラウンドに参加し、著明な先生の講義や手技について学んでいます。今後の活動といたしましては、臨床の現場にも目を向けながら引き続き麻酔学の勉強に励みたいと思います。 今回 1 日あたり 3 件を超える帝王切開の見学や、何件もの脊髄麻酔や硬膜外麻酔を見学しました。中には座学や教科書で学んだ知識通りではない症例も多く、臨床の場で学ぶことの重要性を痛感しました。現在医学部 4 年生であり、年度の終盤には臨床実習も始まります。臨床実習で産科麻酔や麻酔科に限らず、多くの臨床の現場から学びを得たいと思います。 また現在検討中であるため確定はしていませんが、今回の学んだことを生かした論文執筆に携わることができればと考えております。	
海外で活動した感想（現地生活で感じたことや海外留学のメリット等） 今回の研修を通して多国籍の学生やレジデント、医師と医学のみならず様々なことについて議論する機会を得ました。この経験を通じて、異なる医療システムや価値観を学び、より広い視野で医療を捉えることの重要性も実感しました。皆が共通して言っていたことは、「学生時代にたくさんの経験しなさい」ということです。アメリカと日本では、学ぶことに対する学生の姿勢が日本とは違うことを痛感しました。指導して下さった先生方やレジデントの医師たちは常に「何か質問はないか」と尋ねてくださいます。それに対して「ありません。」と返すだけでは相手に「興味がない」という印象を与えてしまうそうです。日本でもこのような場面を目にすることは多くありますが、アメリカと比較をすると多くの日本の学生は主体的に動くことはなく、受動的でいるように感じます。私自身も当初は何を質問してよいのか分からず戸惑っていましたが、体験するうちに自然と先生方との会話を続けることができるようになりました。このようなスキルを大学の臨床実習前に身に付けることができたのは非常に大きな意味があるように思います。 今回の研修では、様々な壁も感じました。高校生の時に英語で論文を執筆・口頭発表したことで英語の環境に身をおいてもどうかなるだろう、と考えていましたが、まだまだ学びが足りないことも痛感しました。海外で医療について議論するためには、もちろん英語で医療用語を知る必要がありますが、現場で使われている省略形の医療用語、加えて大学で習うような成分もさることながら薬剤名やそれらの製品名も知る必要があります。今回は比較的短い期間の研修ではありましたが、日々ホテルに帰っては知識を補填するための勉強や表現を調べる日々でした。将来、海外の方とも議論ができるよう、学生のうちからたくさんの用語を英語でもわかるようより一層勉学に励みたいと思います。このようなことを学生の間に気が付くことができたのも、非常に大きな経験となったように思います。日本にいただけではわからない体験ができましたこと、心より感謝申し上げます。	
指導教授（所属長）署名 東京女子医科大学 麻酔科基幹分野長 教授	
署名欄 大城 沙大里	日付 2025年4月8日

※活動中の写真を 2 枚添付してください。いただいた報告書を後日冊子にいたします。

